

【翻訳＋解説】

マーク・ギンター著、
「神と経営—職場にスピリチュアリティをもたらすことは、信仰と富がミックスしないという古い観念を侵食している。しかし企業社会アメリカの最後のタブーを破り始めている信仰者が増えている。」（後半部）⁽¹⁾

訳者・解説 村山元理

〈本文〉

（神から）答えを頂くために祈ること

ニュージャージー州ニュープロビデンスの地下室で、ケイタリティカ社（Catalytica）を創業してから25年間、リカルド・レヴィ（Ricardo Levi）⁽²⁾は、以下のことを誇らしく見守った。すなわち、同社は小さなコンサルティング会社から、本社がシリコンバレーにあり、工場がノースカロライナ州グリーンビルにあり、1,800人の従業員と、時価総額7億5000万ドルである製薬業とエネルギーの会社にまでに成長したことを。その後、レヴィは、彼のビジネス・キャリアの中で最も困難な決定の1つに直面した。それは、会社の最大かつ最も成功した事業部門を売却するかどうかであった。

「売却を考えたことは一度もなかった。」と、内省的な56歳の化学エンジニアであるレヴィは話す。「企業家は赤ちゃんを保持したいものであり、ずっと死ぬまで一緒にいたいものである。」この問題をさらに複雑にさせることだが、レヴィはDSMと呼ばれるオランダの大手製薬会社である潜在的な買い手のための交渉人を非常に嫌っていた。

レヴィが最終的にケイタリティカ社の大部分を売却するという選択したこと、それ自体は、あまり目立ったことではない。しかし、彼が決断した方法は、識別（discernment）⁽³⁾として知られる古代キリスト教の伝統に従うことによって、心をしずめ、知られざる者（神）に身を委ね、神の意志を見つけよ

うとすることである。・ ・そして、これは今日多くのビジネス・スクールで教えられている管理ツールではないとだけ言っておこう。

しかし、偶然にも、まさにそこで、レヴィは識別を発見したのであった。彼は1998年に、サンタ・クララ大学ビジネス・スクールで「ビジネスリーダーのためのスピリチュアリティ」という実験的なコースを受講した。これは、経営学の教授で敬虔なカトリック教徒であるアンドレ・デルベック (Andre DelBecq) ⁽⁴⁾ によって教えられていた。ユダヤ人であるレヴィは哲学と宗教に長い間興味を示していて、特に彼は東洋の諸伝統に興味を持っていた。例えば、道教に根ざした身体的鍛錬である太極拳を実践した。多くの団塊の世代のように、レヴィは、彼自身のスピリチュアリティのブランドを作り上げた。そして、そのスピリチュアリティは多くの宗教的な諸伝統に根ざしていた。

「私にとって、スピリチュアリティは非常に個人的な問題である」と彼は言った。自分自身は十分にユダヤ人であるとみなしているが、私はシナゴグのメンバーではない。(宗教集団)とあまり関係していないような人は、自らの道を見つけなければならない。そしてそれは困難である。特に、同時に、急成長中の企業のCEOである場合はなおさらである。

確かに、家族の歴史が宗教によって形成されたのと同様に、ビジネスはレヴィの血の中にある。ナチスのドイツからエクアドルに逃亡した、ユダヤ人企業家の息子であるレヴィは、家庭ではドイツ語、学校ではスペイン語を話した。彼はスタンフォード大学とプリンストン大学から上位の学位を取得するために十分に英語を学習した。エクソン社 (Exxon) で一時期、勤務した後、二人の同僚とともにケイタリティカ社の創設に参画した。やがて彼らは二つの有望な技術を開発した。すなわち、化石燃料による汚染を減らす燃焼システムと、複雑な医薬品を効率的に製造する方法である。

彼らはベンチャーキャピタルを作り上げ、会社を公開し、買収により成長し、製薬業界最大の受託製造業者になった。彼らの製品には、抗エイズ薬のAZTとブソイドエフェドリン (Sudafed) が含まれていた。デルベック教授のコースを受講した時には、レヴィの世界は、ひどく多忙で複雑になっていた。

彼は精神的な本を読み、毎朝の瞑想を始め、ホームレスのシェルターの現地見学に出かけた。彼は謙虚にふるまい、ビジネスが成長にするにつれて、より良い聞き手となり、人々と連絡を取り合うように、慎重に努力した。

「それは、あなたが100万ドル稼いだという事実はしゃがむこと（謙虚になること）を意味するということを認識することなのだ」と彼は言う。

瞑想の練習から、レヴィは「役員が耳にする無数の雑音（悪口）を静かにさせる」方法を学んだと言う。識別の中心にあるのは、この心を落ちつかせることである。

ケイタリティカ社の医薬品事業を買収するという申し出があったとき、レヴィは多くの質問を深く考えなければならなかった。投資家に公正な価格を提示することは不可欠だったが、十分ではなかった。会社の売却は、従業員にどのような影響を与えるのだろうか？ 会社の顧客はどうか？ DSMが望まなかったケイタリティカ社の燃焼部門は、単独で生き残ることができるだろうか？そして、残りの人生で自分は何をするのだろうか？

レヴィはすべての質問に対して論理的に取組み、さらに深く掘り下げた。「これらは微妙な問題であり、エクセルのスプレッドシートには収まらない。左側にリストを書き、右側にリストを書いているわけではない」と彼は言う。

「それは何よりも感情の問題である。問題は、何を感じるかである。本当にそれはあなたの尺度である。あなたの全体の精神、あなたの知的および精神的な存在が、問題とどのように相互作用するかである。」これは単に、他の幹部が直感的な決定と呼ぶものにとどり着くための、より規律ある方法かもしれない。

売却を決心したとき、レヴィはDSMという敵に対して感じていた敵意を克服するために瞑想も使用した。

彼は「愛のある方法で」手を差し伸べようとし、彼自身の親切な態度が会談を進めるのに役立つことを発見した。ケイタリティカ社は昨年医薬品事業をDSMに売却した。その燃焼部門は現在、レヴィが会長を務める独立した公開会社である。

確かに、このプロセスは感傷的に聞こえる。レヴィはそのことを知っている。しかし、科学者、エンジニア、およびCEOが話しているということをおぼろげに記憶しておきなさい。懐疑論者に対して、彼は、スピリチュアルな基盤を持つことが、いかなる企業の成功の鍵を握る人々の近くにとどまる方法だと言う。

「人は、あらゆるビジネス方程式の中で最も無形であり、最も複雑な要素である。」と彼は言う。「人々にたどりつく唯一の方法は、自分自身の中に至ること、つまり自分自身を理解することから始めることである。」

ボトムライン（経済性）を超えて

ディック・グリーン（Dick Green）は、控えめな中西部人で伝統的なカトリック信者であり、ブリストクス社（Blistex）と呼ばれるリップケア製品を作る古くからある製造会社の社長である。十年以上、自らの信仰と仕事を統合しようと挑戦したあと、彼は、神とビジネスの間の調和のみを見るような純情な理論家を驚かすかもしかもしれないような結論にたどり着いた。しかし、ときどき、この二つ（神とビジネス）は衝突するのである。

その二つが衝突するときに、グリーンは良心に任せてビジネス上の決定を下すことが出来る。なぜなら、ブリストクス社は、私的所有で、家族所有の会社であり、収益性の高い会社であるからである。ブリストクス社が、昨年5900万ドルの売上を上げたという公表された見積もりについては、あまりにも低すぎたと彼は述べている。そうはいつても、彼は収入や利益を開示するつもりはない。

グリーンもブリストクス社の会長であるデイビッド・アーチ（David Arch）も、より多くの現金を絞り出すことにプレッシャーを感じていない。なぜなら、彼らは創業54年の会社を所有する家族の一員であるからだ。「我々は非常に保守的な会社である。我々は、今していることをただ続けたいだけである。」とグリーンは言う。

グリーンは62歳である。ブリストクス社の共同創設者であるチャールズ・アーチの娘のパトリシ・アーチと結婚した後、1971年にブリストクス社に入社した。ノートルダム大学化学工学専攻の卒業生で、1990年に社長になるまでに、さまざまな部門を回った。

その時までには、彼はBEEJ（優秀さ、倫理、正義のためのビジネスリーダー）として、今では知られているシカゴを拠点とした集まりの立ち上げを支援していた。この集団は、カトリックの司教団が資本主義を厳しく批判する回廊を発行したあとに組織化されたものである。「その団体が生まれた意味は、利益（profit）が不快な言葉（four-letter word）であるからだ」とグリーンは言った。

BEEJはビジネスを擁護するために形成されたが、そのBEEJのリーダーたちは、すぐに自らの内面に焦点に移した。カトリック神学にもとづいて、彼らは、一時帰休、解雇、賃金率などの問題に関する声明書を書いた。グリーンの思考方法は、ときには、予想できない方法で変わった。彼は、例えば基準

に達していない労働者でさえも解雇することを以前はとても困難に感じていた。しかし、彼は、仕事をできないひとたちを「クビにしないことは非道徳的である」という考え方に落ち着いた。

しかし、グリーンも、自分自身が、他の何らかのためというよりも、従業員のために働いているとみなすようになった。もし、彼が、その代わりに、利潤極大化に非常に夢中であったなら、彼はずっと前にイリノイ州オールブルック市郊外の工場から低賃金地域へ移転してしまっただろう。「私たちの製品は他の場所で、もっと安く作れるだろう」と彼はいう。あるいは、プリステックス社は全面的に製造を外部委託出来たはずだった。

グリーンは周期的なまた経済的な低迷の中でも従業員を解雇しない選択を下した。「我々は従業員に機械の塗装をさせ、外壁を塗装させ、さらに従業員が多忙になるために、あらゆることに取り組ませた。」と彼はいう。全労働者が利益分配の給与にあずかり、普通は年収の15%に固定した額であった。その給与は、労働者の退職金勘定に払い込まれた。なぜなら、会社のオーナーたちは、多くの従業員が貯金することでより良い生活ができると思ったからである。「我々は家父長的でありすぎないか。私はそう時々感じている。」とグリーンは語る。

グリーンと他のオーナーたちにとって幸運なことに、プリステックス社は繁盛している。同社は、過去10年間のうち9年間、SMARTマーケティング⁽⁵⁾、ブランド拡張、買収、グローバルな拡大を通じて収益を伸ばしてきた。プリステックス社は財務的にもっとうまくやれたかもしれない。実際にはグリーンにとっては、そのような儲けは、選択肢とはならなかった。「自分が誰であるかを無視して、ビジネス上の意思決定を下すことができるとは思わない。」と彼は言う。

では、ビジネスの世界におけるこの精神性の開花をどのように活用すべきなのか。これは表面的な単なる功利主義的な運動なのか。あるいは、純粋に精神的な覚醒なのか。

これは、フォーチュン誌 (FORTUNE) がビジネスマンたちの信仰の復活について1953年に尋ねた質問だった。13年後、伝統的宗教は余りに衰退して人気を失ったので、タイム誌 (TIME) は著名な「神は死んだのか？」⁽⁶⁾ という有名な表示を飾ったほどである。信仰と仕事を統合させようという、今日のその場限りの取り組みは、長期的な効果を持ちながら、より大きく、より強力なものに合体していくのだろうか。それとも頓挫してしまうのだら

うか。そのことについて、我々は単に知る事が出来ない。確かに、団塊の世代たちの寿命が迫るなかで、彼らが大きな疑問を抱くのは当然である。批評家なら、彼らはすぐに何か他のこと一恐らくゴルフに夢中になるだろうと言うだろう。

それでも、変化は起きる。この世代はそれを見てきた。ウーマン・リブ (“Women’s Lib”) は職場を作り直したのか。私たちは「イエス」と言うだろう。「私のやり方が嫌なら出ていけ」(my-way-or-the-highway) というリーダーシップが新たに台頭するだろうか。おそらく、そうではないだろう。

信じている人たちは、スピリチュアリティが実用的な理由から、最終的にビジネスの世界に歓迎されるだろうと主張している。信仰は機能する、と彼らは言う。これらの企業は人間を全体性として採用する。そうした企業は、1日8時間として労働者の労働を買うわけではない。こうした企業では、お互いを尊重し、上下の階層をこえた学習と聞き取りを促進する人々のチームを展開する。こうした企業には、収益を超えた使命がある。

「スピリチュアリティは、経営や組織行動におけるあらゆる最先端の考え方や収斂している」と、元石油会社の幹部で、現在はジョージ・ワシントン大学で教鞭をとっているハミルトン・ビーズリーは語る。「スピリチュアリティによって、よりパフォーマンスの高い組織が作れる。」

とはいえ、最終的には、職場における信仰運動 (the faith-in-the-workplace movement) がそのような実践的な計算によって推進される可能性は低い。また、コンサルタントや教会によって導かれることもない。むしろ、これまでのように、スピリチュアリティは、自らが行っていることに意味を見出したいと切望するビジネスパーソンによって主導されるだろう。永続的な変化をもたらすのに十分な意志を持ったビジネスパーソンが十分にいるかどうかはまだわからない。しかし、彼らは話し始めており、それが始まりである。(以上翻訳完了)

解説

八
一

本記事は、注(1)にある通り、米国のビジネス誌 Fortune に2001年に発行されたものである。そしてビジネスと宗教(神)の関係について、大きく6人の企業家、実務家における信仰やスピリチュアリティに基づく人間的なビジネス行動について批評したものであり、その新奇性は通例のビジネスとは異なるので、反逆者と形容されている。

スピリチュアリティ (spirituality) という概念は日本語としていまだになじみがなく、霊性、精神性とも訳されるが、アメリカでは、特定教団にはコミットせずとも、大変にポジティブで良い意味での深い宗教性が含意されている。超越的実在への信念、人類の相互依存的な連帯感、グローバル意識とも関連する。文献探索をした狩俣 (2009) では、スピリチュアリティを以下のように定義している。

「自己と自己を超越した外部の崇高なものなどとの一体化や融合化、あるいは自己利益と他者利益の統合化であり、自己利益に執着せず、自己と他者との区別がなくなり、自己即他者あるいは個即全体の意識の状態である。」[狩俣 (2009) 175 頁]

本解説でも、狩俣の説に従って、スピリチュアリティを考えたい。

この記事でも引用されているように、こうした現象は決して新しいものではなく、1953 年にも同じ Fortune 誌で「醜くビジネスマン」という記事がすでに出されていた⁽⁷⁾。この 1953 年と 2001 年という二つの記事から、アメリカにおける「職場と宗教」のこの 50 年間における類似性や違いについては、Hicks (2003) がまとめている。その議論を手掛かりとしながら、より大きな文脈で、この現象の意義を考察してみたい。

1. 1953 年の Fortune の記事

1953 年の記事では、筆者のデュンカン・ノートンタイラー (Duncan Norton-Taylor) はアメリカにおける宗教復興、そしてビジネスマンが主としてプロテスタントに基づく集会を自発的に組織していることを描いている。ここでいうプロテスタントのビジネスリーダーの大半は、長老派 (Presbyterian) か監督派 (Episcopalian) である。

US スティールでは、15 万ドルを投資して、ノルマン・ヴィンセント・ピール⁽⁸⁾ のテキストを労働者のために購入した。聖書を勉強する職場では、11 年間ストライキがない事例も紹介される。ここではトップダウン的に宗教が利用されており、男性中心の職場であり、現在とはかなり異なっている⁽⁹⁾。この当時は、職場と宗教が決して切り離されず、一体的であることも特色である。ビジネスと宗教やスピリチュアリティの分離はその後、起きた現象なのである。

2. 2001 年の Fortune の記事

これに対して 2001 年のギンター（Gunther）の記事では、宗教の多様性、女性労働者の増大も反映されている。この記事ではビジネス生活に宗教やスピリチュアリティから大きな影響を受けた 6 人が主に取り上げられる。その 6 人について、表 1 にまとめた。

オリジナルの記事では、この 6 人の写真が大きく出ていて、大変印象的である。その記事の写真にイタリック体で解説があり、それは表 1 の行動面にいれた。行動面については、必要事項も補足した。

表 1 Gunther（2003）の記事で主に扱われた 6 人

信 仰	所 属	氏名・行動
モルモン教	R.C.Willy Home Furnishing 家具小売り大手企業の会長	Bill Child は Warren Buffet に 家 具チェーン店を売却後に、日曜日に閉店することは良いビジネスであることを説得させねばならなかった。
長老派教会	J.P. Morgan Chase 企業買収の専門家・女性	Zeilstra は、神の名前を表に出さないが、オフィスでは神の仕事をしようとつとめる。
仏教	Jenkins & Gilchrist 法律事務所で弁理士兼訴訟関係者	ダラスの Chrisman は、仕事を離れて年にか月インドで静かに瞑想生活を送る。
カトリック	Greyston Bakery の CEO タルトなど製造 アフリカ系アメリカ人	Julius Walls は沈黙の時間を朝礼に取り入れ、貧困層の支援もする。創業者は、禪の老師であるユダヤ人のバーナード・グラスマン。
カトリック	Catalytica の創業者 製薬産業への最大のサプライヤー。ユダヤ人。	Ricardo Levi は事業売却の決断に、古代キリスト教の「識別」を頼った。東洋の諸伝統にも関心をもつ。教会に頼らず、独自のスピリチュアリティを実践。
保守的カトリック	Blistex の社長 リップケア製造販売、同族企業	Dick Green は個人所有の企業のお陰で、良心に従って事業を運営できる。BEEJ というカトリックのビジネスマンのための組織のメンバー。

七
九

レヴィ（Levi）はユダヤ人であるが、シナゴークに熱心に通っているわけではなく、東洋伝統にも関心をもって、自ら心の道を独自に開発したことが

記事には書かれていた。レヴィの説明にしたがうと、スピリチュアリティとは個人に関することがらである。スピリチュアリティとは個人が構築し、発見し、実践するものである。スピリチュアリティは特定の宗教教団への所属を必要としない。宗教的にならずとも、スピリチュアルにはなることができる [Hicks(2003), p.21]。

1953年には職場の宗教 (religion at work) は特定の教団組織と関係していた。しかし2003年においては、特定の教団組織と関わることはなく、職場のスピリチュアリティ (spirituality in the workplace) は教団組織の加入に代替する形態になった。

個人が独自にレヴィのような独自のスピリチュアリティに至ることは、実際には困難である。企業の経営者や従業員は、宗教的指導者や聖典に依拠しながらも、スピリチュアリティについては、多くのスピリチュアルな経営コンサルタントに依拠している [Hicks(2003), p.21]。

だからといって、特定の宗教組織の加入を辞めているわけではない。グリーンは保守的なカトリック教会のメンバーであり、教皇の回勅に対してもそれ以上にビジネスの現場に対応する、BEEJ (Business Leaders for Excellence, Ethics, and Justice) と呼ぶカトリックのビジネスパーソンの組織を作ったのである。

職場のスピリチュアリティの信奉者は、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教、仏教やウィッカ、ニューエイジ諸宗教の人であり、特定の信仰の無い人、そして個人のスピリチュアリティを実践している多数の人々である [Hicks (2003), p.22]。

3. 2つの記事の共通性と批判、ラリー・ブルケットの活動

職場は世俗的であるという前提が1953年と2001年に社会的背景としてある。しかし、1953年から40年前には、ビジネスを含む社会をキリスト教化しようという社会的福音の学者の主張があった。それは、ウォルター・ローゼンバーグによる『社会的秩序のキリスト教化』(1912)という著書に書かれている。それよりも1年前に出版されたF.W.テイラーの『科学的管理の原理』が社会における近代的で自立したビジネス界の始まりを告げるものであった [Hicks(2003), p.23]。ビジネスの背後には、歴史的にはキリスト教のシンボル、観念、休日があることが、見落とされている。

第2に、どちらの記事も、成功したビジネスの事例が取り上げられ、職場

のスピリチュアリティは成功や収益につながるということが示唆されている。しかし、多くの論者は、宗教やスピリチュアリティへの関心は成功や収益とは関係ないと論じており、記事の論議にバイアスがかかっている [Hicks(2003), p.23]。信仰にもとづいてビジネスを全く取りやめた物語がない [Hicks(2003), p.24]。

第3に、経営者に主眼があり、従業員やファロワーを扱っていないことも問題である。

第4に、宗教と職場に関するその他の重要な側面が無視されている。宗教的服装や宗教的言論が職場で許容されているのかなど。組織の文化や構造についてはふれられていない。

最後に、宗教的多様性にかんする挑戦についてふれられていない。ギンターの記事の6人の主導者たちは、その属する組織内でどのように受容されているのか、あるいはコンフリクトを生じているのについて言及されていない。宗教的多様性のある職場で、宗教間のコンフリクトがいかに克服されているかが問題である [Hicks(2003), p.25]。

以上、Hicks (2003) は、ギンターの一面的な記事の主張を批判していることが分かった。しかし、ビジネスと宗教やスピリチュアリティの関係性が顕著となっている動向を評価していることに変わりはない。

50年の間で、ビジネスと神やスピリチュアリティの教育が教会側から民間に完全に移行したわけではない。既存の教団に代替して、新たな福音的なビジネス教育の団体も現れた。

特に、聖書にもとづいたファイナンスを説いたラリー・バケット (Larry Burkett) [1939-2003] による啓蒙活動があった。ラリーは1976年に Christian Financial Concepts(CFC)というNPOを設立させ、著述し、ラジオ番組(“Money Matters,” “How to Manage Your Money,” and “MoneyWatch.”) で語ったことで有名である。CFCは2000年に Crown Ministries と合併して、Crown Financial Ministries となった⁽¹⁰⁾。

4. マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』との関係

宗教とビジネスの関係に関しては、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(原著・1920年)が大変高名であり、社会科学を学ぶ学徒でその存在を知らないものはいない。その説によれば、

営利を敵視するピューリタニズムの経済倫理（世俗内禁欲）が近代の資本主義という全く新しい社会事象を生み出したことになる⁽¹¹⁾。

世俗内禁欲を構成するものは、フランクリン『自伝』にある勤労や節約というよりも、天職義務と呼ばれるものである。これこそが、単なる金儲けや貪欲を否定して、人間的成長を促す原動力となる社会的雰囲気を経営者と労働者に与えたとされる。世俗の職業は神の召命であるという思想は、マルティン・ルターが聖書を翻訳した際に、天職（Beruf）を使ってから始まったという。この天職概念がルター派よりも、カルヴィニズムとその周辺において、日常生活の中で徹底化されたのであった。

「キリスト教的禁欲」は日本人が考える難行苦行とは大変異なり、「行動的禁欲」だとされる。それはパウロが語るマラソンのようなもので、目的に向かって他のあらゆる欲望を忘れた姿を指す。この禁欲は修道院の中で世俗外禁欲として発達したが、それを世俗内禁欲に移行させたのがルターの「天職」思想である。そして、その世俗内禁欲を実生活で徹底させたのが、禁欲的プロテスタンティズム諸派（カルヴィニズムなど）であった。

キリスト教の教えは、「教会」（Kirche）と「信団」（Sekte）といった宗教集団の組織を通じて教化される。「教会」とは教権者層を備えたカトリック教会、アングリカン教会、カルヴァン派教会など。「信団」には、洗礼派教会の無数の教会、クエイカー、メノナイト、日本の無教会派なども入る。そしてその中間形態もある。前項のCFCは「信団」にも属さない、中間形態であろう。

反営利的な禁欲プロテスタンティズムが、逆に営利と結びついて「資本主義の精神」となった事例として、イギリスのピューリタニズムの文献が利用される。リチャード・バックスターの諸文献は民衆への影響力が大きいとされるからだ。その事例としてあげられるのが、ジョン・バニヤンである。いかけ屋の職人であるバニヤンは立派な信仰をもっていた。金儲けをしようとはせず、神の栄光と隣人愛のため、神から与えられた天職として自分の世俗的な職業活動に専心した。浪費せず、富が嫌でも残ったのである。富裕な人たちが財団を作って社会貢献する理由もここにある。

意図せずして合理的産業経営を土台とする資本主義の社会的機構が作られた。こうした社会機構が構築されると、儲けそのものが自己目的化してしまい、信仰の内面的な力は不要とされるようになった。信仰の希薄化は、まさにジョン・ウェズリー [1703-1791] が嘆いた事態である。世俗内禁欲のエー

トスはマモンの営みに結び付き、金儲けを倫理的義務として是認するようになった。これが「資本主義の精神」である。そして産業革命を呼び起こす精神的な土台が形成されるのである。

このようなヴェーバーの分析に照らせば、忘却された天職義務のリバイバルとして、神やスピリチュアリティとビジネスを統合する運動をとらえることができるだろう。それもダイバーシティがあり、非キリスト教の世界の諸宗教の伝統も加えたよりひろい宗教的心情に基づいていることが現代的な特色である。

5. スピリチュアルな組織文化の創造、グローバル意識の構築へ

既存の教会組織の外、それも各企業体のなかで、宗教やスピリチュアリティが組織の目的や価値に入り込んできている動向がアメリカ社会に広がっていることが2003年の時点で看取された。上記のように、プロテスタントの倫理学者であるヒックスは、その動向を把握する素材として、批判的にFortuneの2つの記事を利用したのであった。宗教の中にいる人が、教会の外にあるビジネス社会の宗教性、スピリチュアリティを批判的に分析していることになる。

2001年で記事となったこの新奇な現象は、アメリカの経営学分野では重要な研究の対象となり、会議や研究が盛んに積み重ねられてきた。特筆すべきことは、2000年にアメリカ経営学会（AOM）の中に、MSR（マネジメント・スピリチュアリティと宗教）という研究集団が正式に組織化されたことである⁽¹²⁾。MSRは2023年4月にInterest groupからDivisionに昇格した。

この研究の蓄積においてはLouis W. Fryのスピリチュアル・リーダーシップ論など、多くの研究がなされている。上記のヒックスが疑問に思った組織文化の具体的な創造の側面については、十分な答えがでていってよい。

MSRの主要メンバーには、特定の宗教や教義にコミットすることはないが、超越的な実在への信仰を前提として、人間精神の変革を求め、人類の相互連帯的な意識の広がり求めているJudi Nealのような研究者もいる。彼女やIan Mitroffらが、MSRと共同主催している団体として、アメリカのGlobal Consciousness Institute (GCI) という団体がある⁽¹³⁾。またこの団体は、ヨーロッパのInner Development Goals (IDGs)⁽¹⁴⁾とも提携している。どちらも研究者が関係しながら、ネットワークづくりや教育的啓蒙により重点を置いている。

個々の企業のリーダーにグローバルな意識を共有させようとする静かな動きであるが、ビジネスが人類にとって経済活動以上に人間的な活動となるために、今後もこの動向を注視していきたい。

以下、補足としてこの領域の研究の一つ教育的な概念を紹介する。

6. ヨーロッパにおける「スピリチュアリティとビジネス」教育

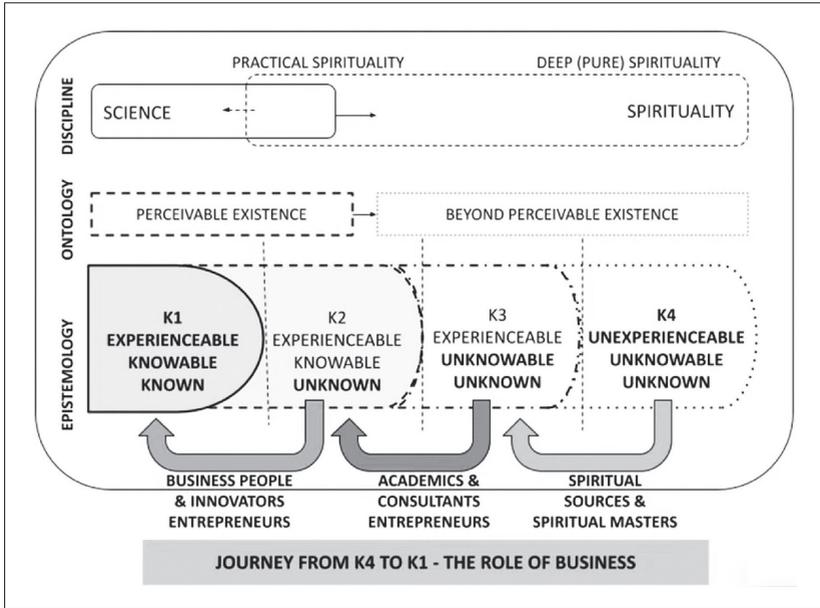
オランダ・ブリュージュの Nyenrode Business University の Sharda Nandram 教授は、「スピリチュアリティとビジネス」について教育している。彼女の Webinar の講演が、2023 年 3 月 28 日あった⁽¹⁵⁾。

人類が複雑で予測不能な個々の相互に依存する課題や危機に直面する中で、新たな思考形式が必要なことが解説されていた。そこには deeper wisdom が必要であるが、彼女の文化的背景であるヒンズー教が説かれているわけではない。より抽象的・認識論的な解釈のもと、意味中心 (meaning centric) のパラダイムが必要だとされた。Spirituality に関する研究が多く、この分野で急増していること、spiritual lens によって研究された企業体の事例、そして新たな認識論の図式が説明された。この分野は既存の経験科学を超えた「知られざるもの」(unknown) の領域である K2, 3, 4 が紹介された。

本稿では十分にこの理論を咀嚼できていないが、以下、文字が不鮮明だが、認識論 (Epistemology), 存在論 (Ontology), 訓練 (Discipline) が図示されている図 1 (K4 から K1 への旅程—ビジネスの役割) を紹介するだけにとどめる。deeper wisdom として東洋伝統の仏教思想ももちろん貢献できることは確かであることだけは言える。

本稿では紹介だけにとどまるが、広く海外のこうした研究状況を理解し、発信していきたい。(6 月 23 日脱稿)

図1 K4 から K1 への旅程—ビジネスの役割



出典：Dr.Sharda Nandram の講演（2023.3.28）

<https://www.youtube.com/watch?v=l8qdqEQM1ho>

注

(1) 本稿は Marc Gunther, "God & Business," *Fortune*, July 9, 2001. の後半部分の翻訳である。前半部分の翻訳は、『仏教経済研究』51号（2022年）に掲載されている。前号でも書いたが、原文は20年以上前に出版された記事である。日本では今なお知られていない、米国におけるスピリチュアリティ（精神性）とビジネスの現況を紹介するために翻訳をすることとした。駒澤大学の外書講読（英書Ⅱ）Bのテキストとして、2021年度、2022年度に利用した。翻訳作業に関わった受講生さんとの対話が、本翻訳作業に生かされた。後半部分は2名の企業家を扱っている。原文には6名の登場人物の写真（撮影：Michael Lewis）や宗教画もあった。注はすべて訳注であり、現時点で必要な解説をいれた。必要に応じて原語を入れ、またカッコで訳を付加した箇所もある。邦訳に際して原著者のグンター(Gunther)氏から快諾を頂いた。後半部分の翻訳では、「である」調で整えた。

(2) リカルド・レヴィ (Ricard B. レヴィ) は現在（2023年3月）の時点で、スタンフォード大学のHPによれば、同校でケミカル・エンジニアリングの助教授と

して後進の指導にあっている。2015年に『若き企業家への手紙：人生を失うことなくビジネスに成功すること―リーダーの進行中の旅路』を出版した。人生を通じて、レヴェイ博士は、スピリチュアリティと人格的成長に強い関心を持ち続けた。そして人間の内面の信念と目的が、ビジネスの成功と密接に関係することを確信している。このテキストの評価は高く、他のビジネス・スクールの企業家教育としても利用されているようだ。邦訳が待たれる。

- (3) 聖書に由来する言葉で、信仰にもとづいて善悪を見分ける力とされる。また『オックスフォード英単語由来大辞典』（グリニス・チャントレル編、澤田治美監訳、終風者、2015年）によれば、discern について、以下のように説明されていた。[後期中英語] 動詞、はっきり見る、識別する：ラテン語 *discernere* 「厳密に調べる、知覚する」(*dis-*「離れて」と *cernere* 「分ける、＜物事を＞区別する」) からなるから派生した古フランス語を経由して入った。当時の文献では、「別々のもの、または全く異なったものとして印をする」という意味で使用された。
- (4) MSR (経営・スピリチュアリティと宗教) という研究集団が AOM (アメリカ経営学会) で 2001 年から活動して久しいが、その創設メンバーであり、アメリカ経営学会の理事長もつとめた著名な経営学者の André Delbecq 教授である。その追悼特集号 (105 頁) が、*Journal of Management, Spirituality & Religion*, Volume 17, Issue 1 (2020) において編纂された。この特集号では、錚々たるメンバーがその学問的貢献、教育的影響や彼の個人的な人物像などを寄稿している。拙稿でもデルベク教授を引用したことがある。参照：村山 (2012)
- (5) Smart Marketing はマーケティングの専門用語。SMART とは、適切な目標設定のために必要な要素の頭文字からとった、目標設定の考え方である。Specific (具体的な)、Measurable (測定可能な)、Achievable (実現可能な)、Relevant (関連した)、Time-bound (期限を定めた) という 5 つの要素で成り立っている。
- (6) Time (1966 年 4 月 8 日) の表紙に、“Is God Dead” という黒の背景に赤の字で表現されて、大きな衝撃を与えたことで有名。ニーチェの “Gott ist tot” をなぞったものであり、世俗化した宗教の現況に対して、神学者、哲学者から多くの議論が寄せられた。
- (7) Duncan Norton-Taylor, “Businessmen on Their Knees,” *Fortune*, October 1953.
- (8) Norman Vincent Peale (ノルマン・ヴィンセント・ピール) [1898-1993] は米国の牧師で、自教会マーブル協同教会 (NY 市) の信徒拡大に成功するだけでなく、多くの著書を執筆した。その著書 *Power of Positive Thinking* (1952) (邦訳『積極的考え方の力』2012 年) は 2000 万部を超えている。牧師は歴代の大統領と関係をもち、1984 年にはロナルド・レーガン大統領から大統領自由勲章を授与された。トランプ大統領は最初の結婚式を牧師のもとで挙げた。
- (9) 2003 年にアメリカの労働省の統計では、女性の労働者の割合は 46.5% である。
- (10) Larry の著書では *Business by the Book* が最も著名である。ラリーの功績については、以下のサイトを参照。

- Lee Weeks (July 14, 2003) *Larry Burkett's life: sold out to faith, friends say at funeral*, <https://www.baptistpress.com/resource-library/news/larry-burketts-life-sold-out-to-faith-friends-say-at-funeral/> (Accessed on March29, 2023)
- Adam Faughn (January 20, 2020) *LARRY BURKETT: A CHRISTIAN FINANCIAL PIONEER*, <https://seedtime.com/larry-burkett-a-christian-financial-pioneer/> (Accessed on March29, 2023)
- (11) マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳 (1989) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫, 378 頁。本節では、大塚の解説に依拠して説明した。
- (12) 村山 (2022) を参照
- (13) 2023 年 4 月 13 日 開催 に、MSR と GCI が ホ ス ト し て、“MSR, Global Consciousness, and Social Challenges” に関する研究者の交流会議が開催されるといふニュースが MSR の会員に告知された。
- (14) IDGs について日本でも紹介されるようになった。新井ほか (2023) 参照。
- (15) Radical Thinkers Webinar: Spirituality & Business with Prof. Dr. Sharda Nandram, <https://www.youtube.com/watch?v=I8qddEQM1ho> (Accessed on March29, 2023)

参照

- Hicks, Douglas A. (2003). *Religion and the Workplace: Pluralism, Spirituality, Leadership*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 狩俣正雄, 2009 年, 『信頼の経営—スピリチュアル経営の構築に向けて』中央経済社。
- 村山元理, 2012 年, 「スピリチュアリティと経営」(経営哲学学会編『経営哲学の授業』PHP 研究所、p.219-227 所収)
- 村山元理, 2022 年, 「AOM の MSR 研究」『WEB 日本経営倫理学会』
<https://www.jabes1993.org/2022/09/aommsr.html> (2022.3.24 アクセス)
- 新井範子・鬼木基行・佐藤彰・新宅剛・水野みち, 2023 年, 『IDGs 変容する組織』経済法令研究会。